

2日目 2024年9月8日(日)
午後の部 14:00~16:30

シンポジウム

研究法の活用から考える新時代の家族研究

司会者：松木洋人（早稲田大学）・木戸 功（聖心女子大学）

討論者：村上あかね（桃山学院大学）

【企画趣旨】

今期の研究活動委員会は、「新時代の家族と家族研究」を共通テーマに掲げて、大会シンポジウムを企画している。その1年目となる昨年度の大会シンポジウムでは、「若者の地方暮らしから考える新時代の家族」をテーマとして、地方で暮らす若者を手がかりに、家族をめぐる「新しい」状況について理解を深めることを試みた。これに対して、2年目となる本シンポジウムにおいては、後段の「家族研究」のほうに軸を置き、家族社会学の研究法に関するテーマを設定することにした。

家族社会学が社会学的な研究方法を用いて家族を対象とした研究を行う学問であることはいまでもない。そして、21世紀以降の家族社会学については、その研究法の多様化が進んだと指摘されてきた（田淵 2006, 藤崎・池岡編 2017）。たしかに、高度な統計分析、いわゆる質的研究や歴史社会学的研究など、今世紀の家族社会学では、それ以前は必ずしもあたりまえではなかった研究法が浸透した。それは個々の研究者からすれば、研究を進めるうえで選択可能なオプションが増えたということにほかならない。このような変化が21世紀の家族社会学研究をより豊かなものにし、その水準を高めることに大きく貢献したことは疑いない。

他方で、社会学のなかにも、歴史があるものから相対的に新しく出現したものまで、さまざまな研究法のレパートリーがあるなかで、日本の家族社会学ではあまり活用されていない方法もある。このことは日本の家族社会学のありかたを特徴づけていると同時に、ともすれば、その可能性を狭めてしまっているとも考えられる。

そこで本シンポジウムでは、これまで日本の家族社会学ではあまり活用されてこなかった3つの研究法を取り上げる。それぞれの方法を用いて家族に関する研究を実践されている報告者にそれぞれの研究成果をシェアしていただくことを通じて、それらの研究法の家族社会学にとっての意義、ひいては、研究法の活用という観点からみた日本の家族社会学の現状やこれからについて議論する機会としたい。

具体的には、『不倫——実証分析が示す全貌』（五十嵐彰・迫田さやか、2023年、中公新書）などで実験を活用している五十嵐彰氏、『総中流の始まり——団地と生活時間の戦後史』（渡邊大輔・相澤真一・森直人編、2019年、青弓社）に代表されるように、計量歴史社会学的研究を展開してこられた渡邊大輔氏、『和みを紡ぐ——子育てひろばの会話分析』（2018年、勁草書房）にみられるように、フィールドワークを通じて収集した相互行為の録画データをエスノメソドロジー・会話分析の立場から分析する研究を続けてこられた戸江哲理氏（神戸女学院大学）を報告者にお迎えする。さらに、『私たちはなぜ家を買うのか——後期近代における福祉国家の再編とハウジング』（2023年、勁草書房）など、マクロな社会や政策の動向と計量社会学的分析とをリンクする研究を発表するとともに、データアーカイブや公的統計にも携わってきた村上あかね氏に討論者をお願いしている。これまでの大会シンポジウムとは異なる観点から、日本の家族社会学の現状とこれからについて議論する場になることを期待している。

【文献】

藤崎宏子・池岡義孝編 2017『現代日本の家族社会学を問う——多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房。

田淵六郎 2006「分野別研究動向（家族）」『社会学評論』56(4): 950-963.

(キーワード：家族社会学、研究法)